

平成 26 年度八重原公民館公開講演会

地域みんなで考えよう発達障害

平成 27 年 2 月 4 日 (水) 10:00~12:00

八重原公民館レクリエーションホール

講師 神田 一起氏(千葉県発達障害者支援センター)

1. 千葉県発達障害者支援センターについて紹介

発達障害者支援センターは、2004(平成 16)年発達障害者支援法の施行以降、全国で 88 箇所が設置され、千葉県では 3 箇所設置されている。センターでは相談を主な業務にしながら、研修・啓発活動も行っていて、今日のように地域の中で研修を行い、理解を深めてもらおうという取り組みも行っている。また、支援が必要な場合には他機関と連携を図っている。私自身は発達障害の相談員として二次障害を専門とし、相談業務を行っている。



2. 発達障害とは何か、まずは知りましょう

発達障害者支援法では、『発達障害』とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの(第 2 条)と定義づけされている。

わかりにくい条文だが、ここで重要なのは、「脳機能の障害」であってその症状が「通常低年齢において発現する」ということ。

発達障害は、1943 年に世界で初めて「自閉症」が登場したが、当時は親の育児の問題とされていた。その後、研究が進むにつれて、自閉症は脳機能の障害ということがわかっていった。さらに、この間の研究によって、発達障害の症状は一生持ち続けるものだが、問題そのものは減らすことはできるということがわかってきた。例えば、自閉症があり、コミュニケーションが苦手であっても、コミュニケーションの手法を改善することで問題をクリアすることはできる。

発達障害というのは生まれ持ったもので、0 歳からその特性をもっている。例えば、注意欠陥多動性障害(ADHD)は落ち着きがなく集中ができないが、0 歳の子だったら誰でも落ち着きがない。

また、発達障害に類するものとして、「トゥレット障害」というものもある。よく取り上げられるのは自閉症や ADHD、学習障害(LD)で、トゥレット障害については日常的にはあまり聞かないと思う。

3. 自閉症

自閉症とアスペルガー症候群、広汎性発達障害の区別について適格に捉えられている人はどれくらいいるだろうか。これらは基本的には同じだが、自閉症とアスペルガーの違いは 3 歳までに

言葉の遅れがあるかどうかで別れる。

広汎性発達障碍というのはそれらの上位概念として位置づいているが現在は、「自閉スペクトラム症」と呼ばれている。スペクトラムとは連続体という意味。自閉症と一口に言ってもこだわりの強さや感覚過敏にはそれぞれ違いがある。そのためこれらを包括して連続体と捉えたものであるが、それは自閉症の有無に境界線を引くことができないとも言える。

自閉症の症状として、コミュニケーションの障碍、常同行動、感覚過敏がある。

コミュニケーションの障碍とは、人の気持ちがわからないため対人関係・コミュニケーションが苦手といったこと。

常同行動とは、関心を示すものが限られていて同じ行動をし続けるということ。不安があるから繰り返すことで安心するという一応の説明はできるが、一人ひとりの行動の意味は実は違っている。そのため、限定的に捉えないことが大切。手順へのこだわりもあり、普段とは違うとかんしゃくを起こしてしまうため、変更があったときには事前に絵カードを使って示しておくことが有効な人も多い。

感覚過敏・純麻とは、刺激に対して異常に正確に反応する、あるいは鈍いということ。通常は刺激を無意識に処理しているものだが、視覚で言えば、感覚過敏のある方は見過ごしてしまうところまで見えている。例えば、蛍光灯の明かりがチカチカ見えるといったことである。このような場合、間接照明に替えたり、野外に出るときにはサングラスをかけるとおさまることもある。聴覚で言えば、赤ちゃんの泣き声など特定の音を異様に嫌がる。触角で言えば、触られることに不快感・痛みを感じる。例えば、優しく撫でられるのが不快であったり、雨が痛いと感じたりする。これらは、刺激の処理に困難があり刺激を正確に捉えているとも言える。通常は、選択的注意（音の中でもピックアップして聞くこと）ができるが、それが苦手。しかし、いろんな人がいるなかで呼ばれても気づかないということは、自閉症の方に限らず普通の人でもあること。こだわりというのも趣味という言い方をすれば同様のこと。その子にとって不快に感じるものはそれぞれ異なり、自閉の方には偏食も多く給食が食べられない人もいる。これは通常の好き嫌いのレベルとは違い、その子にとっては無理やり石を食べさせられるようなことかもしれない。もちろん栄養面で問題もあるので食べられるものから少しずつ掘り下げていかないといけない。

4. 注意欠陥多動症 (ADHD)

「ADHD とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び／又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される」(H15年 今後の特別支援教育の在り方について) とされている。

ADHD の場合、集中することが難しい、衝動性がある、落ち着きがないというのが特徴。このような特徴は小さい子はみんなそうだが、幼稚園などで集団行動を求められたときにわかるようになる。現在では薬の投与は可能だが、それはあくまでも一時的な処方に過ぎない。

重要なことはその子にとって安定を図る方法を考えること。例えば、集中が切れる前に課題を終わらせたり、暴れる前に次のものを与えたりするなど折り合いをつける方法がある。

5. 学習障害 (LD)

「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」(H11年 学習障害児に対する指導について)とされている。

ある学習障害の人の例では、「あいうえお」と横一列に並んでいるものが、本人にとっては文字同士が重なって見えているという。



6. トゥレット障害

「トゥレット障害」というのは聞き慣れない名前だと思うが、これは運動チックと音声チックの両方を兼ね備えたもの。障害がないというのは、言い換えれば日常生活に問題がないということ。

運動チックは自分の意思とは無関係にピクピク動いてしまうもので、激しいものでは腕が大きく動くといったこともある。ときにはチックによって腕が勝手に動いてしまい、相手を殴ったということになってしまうこともある。音声チックは、あ、あ、あ、といったように発声してしまうもの。また、汚い言葉として出てくることもある(汚言症)。

しゃっくりと同じように、部分的には抑制可能であることから半随意と考えられているが、頑張らないといけない。また、我慢した分あとで爆発してしまう。

7. 支援の方法で大切なのは、その子自身に合った関わり方になっているか

支援方法は非常に多様で一律にできるものではない。例えば、大声で怒鳴る、説教する、無理矢理させる…これらは重要な関わり方かもしれないが、その子自身に合うか合わないか(効果があるか)ということの方が重要。

自閉症の子の場合、大声で怒鳴った後では、音声が入っていかなくなってしまうことがある。そうすると本人の中では「大きな音でビクッとただただ」になってしまう。ADHDの子にお説教を長時間しても、集中ができない。それを見て注意する方はますますエスカレートする一方で、子ども自身は飽きてしまうという差がどんどん生まれてしまう。LDの子に無理矢理させても本人がただ苦痛なだけ。

このように、どんなに頑張っても、こちらの求めている結果は得られない。効果が出ないのであれば、その方法は変えた方がいい。つまり常に常識を疑った方がいいということ。

支援というのは周りの大人から発達障害児に対して一方的に押し付けることになる。だからこそ、それぞれの特性を理解しそれに合わせた関わり方が大事。地域での支援のあり方を考えた時にも、一人ひとりがその特性を理解することが大事。

8. 自閉症の支援は、本人が生きやすい環境を一緒につくること

自閉症の場合、構造化 (Structure)、肯定的な姿勢 (Positive)、共感 (Empathy)、低刺激 (Low arousal)、連携 (Links) に則った支援が重要だとされている (英国自閉症協会)。これらによって本人が生きやすい環境を本人と一緒に作ることが大事。

具体的に自閉の方への支援としては、コミック会話というものがある。これは、棒人間を使って、場面、場面を説明するという方法である。

自閉症の方は能力の高い方が多く、なかには大学や大学院に行く人もいる。そのため、支援といったときに本人が抵抗を示すこともある。その際に説明しているのは、能力が低いから使っているのではなく、自閉という特性に合わせた支援として説明している。能力に対する低さということではなく、生きやすさ、生活のしやすさのために用いている。このことは生活に支障が出るからメガネを使うことと一緒にすることである。

また、本人だけでなく親自身も支援の導入に抵抗を示されることがある。その子の障害を認めてしまうとその子の将来をなくしてしまうのだと親は考えやすいもの。親は子どもが将来幸せになれるかどうか敏感で、同じようなケースのその後の話を求められることも多い。

構造化については視覚的な支援を紹介したい。例えば、学習机は横に並んで座っているとこちらの方が気になってしまうので、横にパーテーションを置いてあげる。また、スケジュールの一覧をつくり、上からやることを貼っておく。あるいはそこからカードを剥がして次の活動に移るということを行う。自閉の方のなかにはスケジュールがあると安心できる方もいて、これは知的水準とは別次元の話である。

また、発話がない方に対してはコミュニケーション手段が限られてしまうので、それを教えてあげるのも一つ。その際には、絵カードを使ったコミュニケーションシステムを使うこともある。自閉症の場合、長々と説明してもできないものはできないため、言葉で伝えるだけでなく、文字や絵で伝える (筆談)。このように、目で見えるようにしてあげることも支援の一つ。

特性の理解と同様に支援する側が共通理解を持つことも重要で、行動したことが怒られるのか、褒められるのかわからないと本人は不安になる。そのため、個々の「できること」を作り、周囲の対応を統一させる方法もある。支援がプラスに働いているものはどんどん増やし、マイナスに働いているものは減らしていくことを共通理解しておく。

9. 地域の中での支援は、本人にとって良いことは何か？を考えること

研修や啓発を通じて特性を理解することが重要だが、本人にとって良いことは何かを考えることも重要。本人が言っていること、または親が言っていること、支援者が良いと思っていることが必ずしも将来有益であるとは限らない。支援のあり方として最低限を保障することがまずは大事。これが二次障害を防ぐことになる。本人にとって良いことというのは実はわからない。しかし、それでも社会の一員として生きているということは視点として持つておくことが大事。

今回、地域での支援のあり方について考えると伺ったことから、岩手県一関市の事例をここで紹介したい。一関市では NPO 法人いわて発達障害サポートセンター「ええ町づくり隊」が、地元の大町商店街でパンフレットを配って自閉症児・者への理解を広げ、本人が自立して暮らせるまちづくりを行っている。自閉症は目には見えないのでバッジを渡して、理解してもらえよう、

マークをつけて、買い物の練習等を行っている。そのことへの良し悪しはあるかもしれないが、まずは正しく理解し、あたたかく支援してもらえよう取り組んでいる好事例と思う。

10. おわりに…発達障碍の研究は今も進んでいる

支援の難しいところは、発達障碍の全てがまだはっきりと分かっていないということ。現在、オキシトシンによって共感性を高める研究が進められているが基本的には特効薬というものはない。診療方針も数十年前とは全く違ってきていて、昔は、親の愛情不足が原因と考えられていたこともあるが、現在は否定されている。

そのため、発達障碍と関わる方は常に最新の知見を取り入れておくことが大事。今回話していることも、あくまでスタンダードの話で、発達障碍の研究は現在も進んでいる。これをきっかけにぜひいろんなところで学んでもらいたい。

ちなみに、毎年4月2日は世界自閉症啓発デーとなっており、4月2日～8日は発達障害啓発週間となっている。昨年の講演テーマでもあったように、まずは「知ること」が大事、そしてその輪を広げていくことだと思う。



11. 質疑応答・感想

- ・ 企業でも最近では、子ども一人ひとりのニーズに合わせた柔軟な取り組みがされつつあると働いていて感じる。地域で働く者として今日は関わり方を考えることができた。
- ・ 自分自身も発達障碍があった。今、妹の子どもが1歳になるので参考にしたい。
- ・ 講義のなかで3歳まで話せるかで自閉症かアスペルガーかが判断されるようになっていたが、歩行については判断基準に入っているのか？
→診断基準について言えば歩けるかどうかということは含まれていない。しかし動作の遅れについては診る視点となる。
- ・ 落ち着きがなく30分持てば良いかなというくらいだがどうしたらいいのか？
→集中の時間をつくるのが大切。30分の中で何をやるか。うまくできるところを取り入れたり、休憩を取るようにしたりして、本人に合った方法を選択する。また、支援者にとっても負担のない関わり方ということが大切。
- ・ 発達障碍“支援”という言葉に引っかかりを感じる。「支援」というと支援する側と支援される側が常に決まっている。しかし、発達障碍の子どもの豊かな世界観や愛嬌にはいつも新鮮な気付き・学びをもらい、むしろ支えられていると感じる。つまり支え・支えられという相互の関係があると思う。講義の中で、「社会生活に支障のあるものを障碍と捉える」といった話があったが、発達障碍に限らず、貧困や精神疾患など社会生活に支障のあるものはたくさんある。発達障碍をきっかけに、支え合える社会づくりについて考えていくことは、誰もが安心して暮らしていけるまちづくりにつながっていくことになる。今回のテーマに「地域」とあったが、一見すると捉えどころのない言葉のように感じるが、「ご近所さん」という言葉で置き換えてみたときに具体的に見えてくるもの、アクションの方法があると思う。